

令和6年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(学校推薦型選抜 I)

小 論 文

(地域学部 地域学科 地域創造コース)

(注 意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は3ページ、解答用紙は3枚、下書用紙は3枚である。
指示があってから確認し、乱丁、落丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合は、ただちに試験監督者に申し出ること。
3. 解答は解答用紙(横書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙及び問題冊子の余白を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

次の課題文は、現代社会において、「地域課題の解決」や「地域活性化」を論じる際の問題点について述べたものである。文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

現代では地域を舞台に活動する多くの人間にとって、「地域課題の解決」というキーワードは避けては通れないものとなっている。特に、大学教員や各種研究機関において研究や教育に従事する者にとって、それは分野や対象に関係なく何らかのかたちで関わらざるをえない問題である。ある地域が何らかの課題を抱えているとしよう。例えば、人口減少や高齢化が進行することで、「農業の後継者がいない」「商店街が衰退している」「祭りがなくなりそう」といった課題である。こうした課題を解決すること自体は大事なことであり、そのために研究・教育するということはきわめて正しいことのように思われる。しかしながら、私はどうしても違和感をぬぐえないでいる。

私はこれまで研究や教育に関わるなかで、「地域を活性化したい」「地元を盛り上げたい」という人々にたくさん出会った。とくに大学では、そのような興味・関心をもって私が担当する「地域社会」に関連する講義やゼミナールに出席する学生が多い。彼ら・彼女たちは動機こそ様々ながら、共通して地域課題の解決を志向し、そのために大学で学ぼうとする。そこでは、地域を活性化することは疑いようもなく正しいものなのである。

そのような学生に対し、私は「どうして地域を活性化したいのでしょうか」ということを尋ねる。ある学生は、「人口減少が進んでいるので、田舎に仕事をつくって地域に人を増やしたい」と答え、ある学生は「地域が高齢化しているので、イベントを開いて若者を呼び込みたい」と答える。どちらも私の質問に対する回答にはなっていないが、なんとなく言いたいことはわからないでもない。他方で、私の質問に対し、「えっ」という表情をして言葉が出てこない学生もいる。授業後の感想を文章で書かせると、「どうして地域の活性化をするのか、ということについて考えたことはなかった」「改めて考えてみると、よくわからない」といった回答がみられる。地域を活性化するとして、それはいったい「誰にとって」、「何のため」に必要なのか。学生たちには、こうした問いがすっぽり抜け落ちていることが珍しくないのである。

学生たちに聞いてみると、その多くが小中高の学校教育において、社会科や総合学習の時間に地域課題について学び、その解決方法について考えるというような取組を経験している。これは自分たちを取り巻く地域に関心を持つという意味では良い取組なのだが、学生たちの話を聞いていると、そこで扱われる地域の課題とは人口減少や高齢化にまつわるものであることがほとんどである。そして、そのような課題の解決策として、彼らは「地域産業の振興による雇用の増加」「若者をよびこむイベント」「地域をSNSでPRする」などの、きわめて似通った提案を行ってきたのだ。

ここで私は、学生たちを批判したいのではない。そうではなく、どうして学生たちが上記のような志向（思考）をもつのか、その背景にある「知の枠組み」とでもいうべきものについて考えたいのである。先述のように、地域課題の解決を目指すこと自体は悪いことではない。問題なのは、その課題の中身と解決方法が似たりよったりであるという点にある。地域の人口や面積、産業や自然、歴史や文化な

どは地域ごとに異なっている。そして地域内においても、人々の生活や置かれた環境はそれぞれに異なっているはずだ。にもかかわらず、地域を活性化することがゆるがぬ正義とされ、そのための課題解決のありようが画一的に「パッケージ化」されてしまっているのである。

ここまで述べてきたように、現代社会においては、地域の存続・発展を是とし、そのために課題の解決を行っていくことが肝要であるという、地域の活性化をめぐる知の枠組みが、人々の志向（思考）を規定しているように思われる。本書ではこのような知の枠組みを、「地域活性化フレーム」と呼ぶことにする。それは、「Xによって地域を活性化する」という人々の思考の枠組みであり、「Xによって地域を外側から活性化する（Xの例：開発、政策など）」という思考にも、「Xによって地域を内側から活性化する（Xの例：地域住民の主体性、人のつながりなど）」という思考にも、共通して含まれているものである。

しつこいようだが、筆者たちは地域課題を解決することも、それによって地域が活性化することも、問題だと思っているわけではない。この地域活性化フレームの問題点とは、地域の人々の多様な実践を、「活性化に寄与するか否か」という狭い枠に押し込めて評価し、起こっている現実をゆがめて解釈・提示してしまう恐れがあるということにある。例えば、当たり前だが地域の課題というのはそんなに簡単に解決するものではない。そのような事態に直面する人々は、しばしば居心地の悪い思いを抱えながら、立ちすくんだり、途方に暮れたり、迷ったり、うろたえたりしている。だが、活性化の「成功事例」を追いかけがちな私たちは、地域におけるそのような「まごつき」の実態や実践を、どのくらいきちんと把握・理解してきただろうか。

さらに、地域活性化フレームに基づいた国の政策や人々の言動が、ときに人々の多様な生き方を否定し、生きづらさにつながるという問題点も存在する。このフレームは、「地域の人々の活性化への願い」を暗黙の前提にしてしまっていないだろうか。だとすれば、「地域の消滅を受け入れる」ような人々がいかに充実した生を送るのかという問題は、ほとんど顧みられなくなってしまう。あるいはこのフレームは、活性化に向けた課題解決を至高の目標とし、そのためにあらゆる手段を動員するという考え方を生んでしまっていないだろうか。だとすれば、人間や自然を活性化のための「道具」として捉え、その役に立つか立たないかで価値を判断するという、かなり危険な思想へとつながりかねない。

以上のように地域活性化フレームには、地域に住まうことをめぐってある状態を「正常」・「正解」・「成功」と規定し、そこに当てはまらない状態を「異常」・「間違い」・「失敗」として不可視化したり排除したりするような作用が含まれている。そして、このような作用の根底にあるのは、地域における居住をコントロール可能、予期可能なものにしたいという近代的な欲望なのではないかと筆者たちは考えている。

（出典：芦田裕介・北島義和, 2023, 「農村における住みづらさとは—地域活性化を問いなおす」渡邊悟史他編『オルタナティブ地域社会学入門—「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす』ナカニシヤ出版, pp. 1-14. なお、本文転載にあたり文章の主旨を変えないかたちで、一部本文および小見出しを省略した。）

【問1】「地域活性化フレーム」とは何か。著者の主張する問題点を踏まえて、簡潔に要約してください。
(400字以内)

【問2】問1にまとめた「地域活性化フレーム」の見方を踏まえたうえで、身近な地域課題を解決する取組について、あなたが考えたことを述べてください。(800字以内)